

# たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報 No.15 平成元年3月1日



## 縄文美人

今からおよそ五千年も前の縄文人たちは、一体どんな顔をしていたのでしょうか。写真や絵のなかった当時、それを知る術はありませんが、唯一「土偶」と呼ばれる土の人形に縄文人たちの顔が刻み込まれています。土偶のほとんどは女性を形どったものといわれていますが、このイキイキとした美人ぞろいの顔を見て下さい。受験地獄もリクルート疑惑もなかった縄文時代。今とは違った意味でゆとりのある生活を送っていたのでしよう。

ちよつと耳を澄まして下さい。彼女たちの声が聞えてくるようではありませんか。そうですね。彼女たちは私達に何か一生懸命語りかけようとしているのです。しかし、その声も五千年の歲月の中でだんだん聞きとりにくくなっています。その声を今私達は発掘というコミュニケーションを通してなんとか聞きとろうと耳を澄ましています。(小栗)



今回は八王子市松木地区のNo.107A遺跡を紹介します。

本遺跡は大栗川と太田川に挟まれた舌状台地上に位置します。水利良好なため縄文時代から現代までの生活の跡がみられる複合遺跡です。

No.107遺跡は過去に台地西側や東側低地などで調査が行われています。今回は東端台地上とその南側谷部をNo.107A・107B遺跡として別々に調査しています。

時代ごとに紹介しますと、縄文時代は中期・後期の住居跡が11軒、土坑、多数の埋甕などが調査されています。奈良時代は住居跡3軒が検出されています。

中世はこの遺跡の中心となる時期で塚と考えられる

溝3条、多数の柱穴（建物跡）、井戸2基、地下式坑2基、土坑などが検出されています。

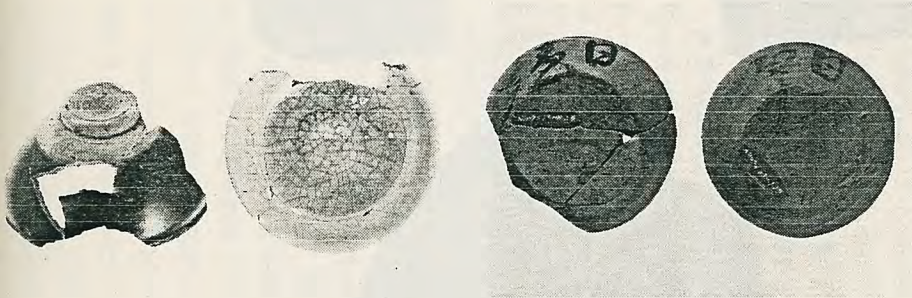
この中世の遺構は、新編武蔵風土記稿に「永祿のころ松木台に大石信濃守館があった」と記載されているものにあたりと考えられます。この人は「たまのよこやまNo.13・No.14号」で紹介されている豪族の大石氏の一族で、大石信濃守宗虎という人です。宗虎は永林寺に建っている銅像の大石定久の弟か子供の大石定基と同一人物と考えられています。つまり、滝山城や高月城を築いた一族の有力者の館跡ということになります。

遺物は塚の中などから、舶来の陶磁器や陶器（写真上段左）、素焼きの「かわら

け」（写真上段右）などが多数でています。

江戸時代以降も大きな家が建っていたとみられ、何軒分もの柱穴がでています。

（福田・佐藤・伊藤）



文化財講座 <11>  
旧石器時代と人々

日本の旧石器時代が今まで考えられていたよりはるかに古く、約20万年前以前の中国の北京原人に匹敵する年代まで遡ることがわかったのはごく最近のことである。この時代は前期旧石器時代と呼ばれ、日本は、

旧大陸西半に広がるハンド・アックス石器群とは別の、より湿潤気候に適応した小型割片石器群に含まれるらしい。やがて大陸から中期旧石器時代のムステイ工技法が日本列島にも伝わ

り、この時代後半には多摩ニュータウンにも初めて人間が姿を見せるようになる(No.471 B 遺跡、約5万年前)。旧石器時代の人々の生活が具体像を持つようになるのは、ようやく後期旧石器時代に入ってからである。

この時代はナイフ形石器という日本列島で生まれた特徴的な石器を中心とする文化を形成し、遺跡も約4千箇所ほどに爆発的に増加している。多摩ニュータウンでも約70遺跡が発見されている。それでも旧石器時代の人々と同じ生活内容を示すと考えられる現生狩猟採集民の人口密度(0.2人/km<sup>2</sup>)を参考にすると、多摩ニュータウン地域(約30km<sup>2</sup>)では6人程度の人口密度が推定されるに留まる。当時はせいぜい一家族程度が生活していたことになる。旧石器時代の人々は、一年中固定した住居を作らず、季節毎に環境の異なる一定の範囲を集団で移動する生活をおくっていたと思われる。

種々の証拠からその範囲は径100〜200km圏を考えてよく、例えば関東地方の南と北を含むような地域を想定できる。旧石器時代の多摩ニュータウンは、一家族が一年中生活を維持するには狭すぎたようだ。(佐藤宏之)

多摩の歴史を訪ねて①

多摩の豪族大石氏 その三

大石信濃守館跡(No.107遺跡)が調査されています。館は、北側に大栗川が流れる舌状丘陵上に位置し、北から西側にかけては大栗川が自然の堀となり、西側は高地で丘陵とは段落差を有し、南側は崖が続いて下方は谷地状を呈する要害に築かれています。

調査所見では、堀に守られた館の一部が確認されており、16世紀代の遺物が出土しているとのこと。今後の調査の進捗がとても楽しみになります。

大石氏の出自には、上野国で栄えたあと武蔵国に進出したという説もあります

が、大石定久の叔父一種長純が建立したとき、大石遠江守の墓があったという永林寺や、伝承大石信濃守館跡などのある、由木の地の土壌が成長したという説が有力であります。

大石氏が活躍するのは、

室町時代に武蔵国の守護代になってからですが、それ以前の由木の地の歴史を少しふりかえてみます。

平安時代の後半、馬の生産地(牧)として栄え、そこから武士団が成長しました。横山党や西党など武蔵七党と呼ばれるもので、鎌倉幕府成立の時には、勇猛な武士団として名をはせました。横山党は、由木の地

にその勢力を持っており、今の白山神社付近に経塚(写経した経典を埋めた塚)を築いたりしました。

鎌倉幕府が開かれてからの武蔵国は、幕府の直轄地として、その経営に重要な地となりました。横山氏は、和田氏と北条氏の争い(和田合戦一二一三年)の時、和田氏と結び滅びますが、その姿は、鎌倉武士の理想として後世まで語り継がれました(古謡曲横山)。

多摩の地で、平安時代に発生した武士団は成長し、鎌倉幕府成立に大きな力となりましたが、それ以後も

在地の土豪層として力を蓄え、室町時代になり、大石氏の台頭をみます。

南関東において、中世社会の幕開けから、その表舞台に立った多摩丘陵(由木の地)ですが、後北条氏が豊臣方に敗れて後、すなわち徳川氏の関東支配が始まってからは、江戸という一大消費地をかかえた農村域として位置します。

近世における農村としての多摩の姿は、近年まで変わらず、多摩ニュータウンの開発が始まるまで続きます。横山氏や大石氏が活躍した中世、近世末の新撰組という勇猛な人々を輩した多摩の地も、それ以降静かな農村としてたたずんでいました。

今、新しく拓かれている多摩の丘陵に、歴史の流れが感じられます。

横山が生まれ育てし由木の地ぞ信濃守も

夢のまた夢 (福島)

第2回多摩ニュータウン遺跡群を考えるシンポジウム

2月5日(日)、当センター主催「槍の文化史」のシンポジウムがバルテノン多摩小ホールで開催されました。今回は、旧石器時代に使われた槍を通じて考古学、民族学、古生物学の方面から、当時の狩りを中心とした人々の生活を明らかにしようとするものです。

講師には、アフリカのブッシュマンの研究で著名な京都大学田中二郎氏、旧石器時代の動物については、愛知教育大学河村善也氏、考古学では、神奈川県立埋



田中二郎氏



会場

蔵文化財センター白石浩之氏、同志社大学松藤和人氏、元前田耕地遺跡調査会橋口美子氏を迎えました。当センターからは、館野孝、比田井民子、伊藤健が発表しました。考古学関係者、学生、一般市民の方々、約250名の参加がありました。

「日本列島発掘展」  
いよいよ東京会場へ

写真右は東の代表。写真の左は関西の代表。いずれも縄文人の顔ですが、すでに違いがあるものです。



お待たせしました。原

始・古代の祭り」をテーマ

とした展覧会がいよいよ始まりです。皆様のご来場を多くの縄文人がまつています。場所 東京大丸12Fグランドホール 期間 3月2日(木)～3月14日(火) 第14回東京都遺跡調査研究発表会

2月12日(日)、武蔵野文化協会、北区教育委員会、東京都教育委員会の共催により北区公会堂で開催されました。当センターから武笠多恵子、内野正が多摩ニュータウンNo.796遺跡、同じくNo.200遺跡について研究発表を行いました。

ミニ・シンポジウム

1月30日、当センターの会議室において、釜山女子大学安春培氏を迎え「細石器文化の日韓交流」の会を開催しました。氏は、近年慶尚南道咸陽郡居昌の壬佛里遺跡の発掘を終え、その成果をスライドを利用して紹介し、内外の研究者約30名と意見を交換しました。

遺跡データベースの利用始まる

昨年、郵政省からお年玉付き郵便葉書に付加される寄付金の配分を受け、多摩ニュータウン遺跡のデータベースシステムを当センター記録整理室に備えることができました。この導入により、たとえば、縄文住居が発見された遺跡のリストやそのニュータウン地域内の遺跡分布などがコンピュータを用いてすぐ表現できるようにになりました。

トピックス

11月1日 展示ホールに多摩ニュータウンNo.513遺跡の模型が新たに加わりました。

12月25日 昨年焼失した遺跡庭園復元住居の再建が始まりました。3月20日には出来上ります。

11月25日 警視庁交通部長・財団法人東京交通安全協会長から昭和62年に引き続き「無事故優秀証」を交付されました。

2月19日 展示ホール展示替が終わり、新しい展示が始まりました。テーマは、「道具のルーツ」です。

▼昨年4月、東京都教育文化財団の一組織として再スタートした東京都埋蔵文化財センターも、皆様の御支援を得て、やがて一年を過ぎようとしています。

この一年は夏の異常な長雨には悩まされたものの、それを取り戻すかのように冬は晴天が続き、自然の恵を感じさせられる年でもありました。一月には元号も平成と改まり、センターは目下、平成元年度の準備に追われております。相も変わらぬ御支援と御協力をお願いいたします。

発行

財団法人東京都教育文化財団  
東京都埋蔵文化財センター  
〒206 東京都多摩市落合1-14-2

☎ 0423-73-5296

0423-74-8044

平成元年3月1日